

ヨブ記42章1-6節 「この目で神を見る」

1A 思い上がりの告白 1-3

1B 神の全能の力 1-2

2B 神の主権 2

3B 神の不思議 3

2A 悔い改め 4-6

1B 「神について」ではなく「神を知る」 4-5

2B 自分の蔑み 6

本文

ヨブ記 42 章を開いてください。私たちはついに、ヨブ記の最後の部分を今日読みます。午後に 40 章から 42 章までを一節ずつ読みます。今朝は、42 章 1-6 節にあるヨブの悔い改めの言葉に注目したいと思います。

42:1 ヨブは主に答えて言った。42:2 あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。42:3 知識もなく、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。42:4 どうか聞いてください。私が申し上げます。私はあなたにお尋ねします。私にお示しください。42:5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。42:6 それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

これまで、全財産の喪失、子供たちの死、そして重い皮膚病の中で苦しみに悶えていたヨブが、今、初めてその魂を静めています。その悲惨な状況は全く変わっていません。しかし今、彼の心は完全に満足し、神の前でへりくだり、悔い改めています。彼をそこまで満足させた理由は、5 節にあります。「しかし、今、この目であなたを見ました。」ヨブはついに、神を見ることができました。これが、彼の最も大きな苦しみでした。主が何をされているのか分からない、答えてくれ、とヨブはずっと訴えていました。そこで神が嵐の中で現れたのです。神は霊ですから、肉眼で見ることはできません。しかし神に直接語られ、神の存在をこれまでになく現してくださり、これまで呻いていた神の不在を、神が完全に満足させてくださった、ということです。

私たちは、「自分には理解できない不条理な世界」の中に生きている中でどのように希望を持たばよいのかを学んでいます。なぜ、こんなことが起こるのか？その不安と不安定は測り知れません。多くの主義主張は、おそらくそうした恐れから出てきています。個人生活の中でも、私たちの周りで理解できないことが起こります。そこで、私たちは「なぜ？」という解答を得たい、ものすごい渴望が起こります。しかし実は、その「なぜ？」という言葉に対して、前回も話しましたが、「なぜな

ら」という答えが来たとしても、私たちの心は満足することはないのです。元々、自分の理解をはるかに超える、神のご計画の中でこれらのことが起こっていることだからです。

しかし、私たちはその問いかけをやめることができる時があります。それは、神ご自身に会うことです。神と人格的、個人的な出会いをすることです。神が誰であるかを知れば、自分の身に何が起こっても、そこにある安心と満足は、自分の理解を超えて私たちを安定させます。私たちが、苦しみの中にある人々に、どのような言葉をかけるべきか、どのように説明すべきか悩みます。しかし、実は慰めはとても単純なことでできるのです。「何を語るのか」ではなく、「そこにいるかどうか」であります。その苦しみの中で共にいるかどうか、説明ではなく存在が相手を慰めます。その存在こそが、相手を気にかけているという愛の表現であるのです。

そして、いっしょにいるという愛から出てくる言葉こそが、人を慰めます。そこにある安心と信頼感は、言葉の技法では決して埋めることができないものです。例えば、「馬鹿野郎」と言ったとします。これは罵りの言葉ですが、私たちがこの言葉を、ツイッターやLINE やその他の文字伝達手段で使ったら大変なことになりますね。しかし、自殺しようとしていたけれども抱きしめて、未遂で助け、泣きながら「馬鹿野郎！」と言ったらどうでしょうか？それは愛情に満ちあふれた表現として受けとめられます。何を語ったかではなく、いっしょにいるかどうかの方がもっと重要なのです。

神はこのことをヨブに行われました。神は嵐の中でヨブに現われて、立て続けに彼を尋問し、叱りつけられます。しかし、それらの言葉は彼を責め立てるものではなく、むしろ深い魂の癒しをもたらすものでした。中途半端な表面的な関係ではなく、深い、人格的な信頼関係から出てくる、厳しいのですが、かつ魂に根本治療をもたらす慰めの言葉だったのです。それらの言葉を聞いた後にヨブは、今の言葉を語ったのでした。

1A 思い上がりの告白 1-3

1B 神の全能の力 1-2

まずヨブは、「1 ヨブは主に答えて言った。2 あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。」と言っています。彼が初めに語ったのは、全能の力です。主は、ヨブに神の恐るべき力をお見せになりました。神はこの地の基を造られ、海を造りまた陸地を定められ、また雲を造り、雨を降らせ、雷や稲妻も神の業であります。そして野生の動物をお見せになりました。ヨブが決して飼うことのできない動物は、人の手が全く加えられていないのに、それでもたくましく生きています。そして、40 章と 41 章には、陸地と海に棲む、最も獰猛で決して制御することのできない、ベヘモットとレビヤタンを神は示されます。この二つの生き物については午後に詳しく話しますが、到底人間には対抗できない、恐ろしい存在です。しかし、それらをさえ神は抑えつける力を持っておられます。神には、全てができるのだということをヨブは悟りました。

2B 神の主権 2

そして、「あなたは、どんな計画も成し遂げられる」と告白しました。新共同訳では、「御旨の成就を妨げることはできない」となっています。ここが、ヨブの最も悩んだ部分ではないでしょうか？彼に続けざまに起こった不幸は、みな神がサタンにそれをしてもよいと許可を与えたからに他なりません。けれども、それを知らされていないヨブは、神は悪に対して何ら力を持っていない、あるいは力を持っているが、その悪を引き起こしているのは神であると思いました。しかし、どちらも間違っています。悪いことが起こっている時、それを引き起こしているのは神ではありません。しかし、神は悪に対して無力だということでも全然ありません。

むしろ神は、悪魔の仕業をもご自分の主権の中で完全に掌握しておられる、というのが真実です。神は悪をどうしようもできないのでもなく、また悪を引き起こして私たちに意地悪をしているのでもなく、悪をその手でしっかり制御しておられ、そして制覇してくださいます。とてつもなく獰猛な、ベヘモットとレビヤタンをさえ神はご自分の力強い手の中に入れておられます。ですから、ヨブの人生に起こった不条理も、神が完全に支配しておられるのです。

3B 神の不思議 3

そして3節で、「知識もなく、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。」と言っています。初めの言葉は、主がヨブに嵐の中で語られた言葉です。38章2節に、「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。」と主が語られました。

私たちの魂は、ヨブと同じようにとても辛いことが起こると、意気消沈して、神に対してなぜなのかという疑問を投げかけます。そして、神に対して、また友人に対して、かなり激しい言葉を投げかけました。そうすることによって、神がご自分の計らいの中で行われていたことに、文句を言い、履き違えたことを言い、全く間違った意図でこれらのことを起こっているのだと断じたのです。それが、摂理、あるいは経緯を暗くすることでした。

ここで大事な言葉は、「不思議」という言葉です。イエス様が、お生まれになることを前もって告げたイザヤは、この方のことを「不思議な助言者(9:6)」と言っています。不思議というのは、人の業ではどうにもできない、人の理解をはるかに超える神の奇しい業のことを言います。この世においては、不思議なことだらけです。自然を見る時に、なぜこのような造りにになっているのか、畏怖の念に打たれることがあります。そして、なぜ神がこのようなことをしているのか、理解を超えていることがあります。

しかし、それらは私たちが知って理解するものではなく、ただ静まって、主がなされていることを認めることが重要であります。「主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。まことに私は、自分のたましいを和らげ、静め

ました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のように御前におります。(詩篇 131:1-2) 私たちは困惑することがあります。自分には理解できない、到底、受け入れられないことが起こります。しかし、その困惑こそが大事であり、それは自分ではなく、神がこの状況における主人なのだということを認識させてくれます。はたして自分が人生の主なのか、神が主なのか、このような時に神は明らかにしてくださるのです。

2A 悔い改め 4-6

そしてヨブは、悔い改める言葉を話します。

1B 「神について」ではなく「神を知る」 4-5

この4節の言葉は、新改訳ではヨブが語っている言葉として訳されていますが、一部は主ご自身の言葉です。「どうか聞いてください。私が申し上げます。」と言った後、「わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。(38:3,40:7)」となります。ヨブが、主がご自分に問い質された言葉を引用しているのです。

そして5節、「私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。」とあります。新共同訳は、「あなたのことを、耳にはしておりました。」とあります。神のことを知っているのと、神を知ることには大きな違いがあります。誰かについて知っていることと、誰かを知っているのはずいぶん違いますね。私は、自分の妻を知っています。それと、私は舂添都知事のことには知っています。ここには歴然とした差があります。妻は、直接彼女を見ています。そして語り合い、交わっています。舂添都知事はテレビやインターネットという媒体で見えています。彼の発言も読んでいます。しかし、間接的です。ですから、私は舂添さんを知っているとは言えません。しかし、多栄子を知っているとは言えるのです。ヨブが体験したのはこのこととあります。神のことについて知っていました。けれども、神を今の時のように知りませんでした。

神のことを聞いているけれども、神を知らなかった人々は、聖書の中に数多く出てきます。聖書には、ネブカデネザルという人物があります。彼はバビロンという、イラク南部に都を持つ世界的帝国を築いた人物でした。彼はイスラエルの地域も支配し、ユダヤ人を捕虜としてバビロンに移送させました。その中に王族の少年四人がいました。ダニエルとその友人三人です。バビロンは、非常に優れた文明を持ち、その教育や文学は当時の先端を行っていました。しかし、占星術を中心としたバビロン宗教があり、多神教信仰を持っていました。ちょうど、先端技術を持つ経済大国日本が、その閣僚が伊勢神社にお参りにいくわけですが、そのような感じです。

しかし神は、ダニエルと友人三人を通して働き始められました。ネブカデネザルが王となり二年目の時に彼は夢を見ました。それは心を騒がせる生々しい夢でしたが、夢というものは起きるとすぐ忘れてしまいます。あるいは、わずかに覚えていたのかもしれませんが、はっきりさせたいと思っていました。それで当時のブレーンたち、学者たちを集め、その夢を告げ、さらに解き明かしをし

なさいと命じました。けれども、彼ら呪術者らは、夢を教えてくれないと解き明かすことはできない、と言いました。ネブカデネザルは怒り始めました。そして、彼らはこう言ってしまったのです。「王のお尋ねになることは、むずかしいことです。肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それを王の前に示すことのできる者はいません。(ダニエル 2:11)」バビロンの宗教は、みなどこかに住んでいる神々です。しかし、この自然界を超越したところの神でなければ解き明かすことはできない、永遠の神、超越した神でなければできないと告げたのです。

それでネブカデネザルは怒り狂いました。知者と呼ばれる者たちをみな殺せと命じたのです。その中にダニエルと友人三人がいたのですが、ダニエルが王の侍従長を説得して時間の猶予をくださいとお願いしました。そして祈ると、天から啓示がありました。神がはっきりと示してくださったのです。それでダニエルはその夢は、人の像についてのことであり、その解き明かしはバビロンから始まる世界帝国の興亡を伝えている、最後はメシヤによって神の国が立てられることを告げました。そこでネブカデネザルはダニエルと、友人三人の神をほめたたえました。こう言っています。「あなたがこの秘密をあらわすことができたからには、まことにあなたの神は、神々の神、王たちの主、また秘密をあらわす方だ。(2:47)」ネブカデネザルは、ダニエルの神、天の神を知ったのでしょうか？これだけ明らかな解き明かを受けたのですから、彼は神を知ったかに見えます。

いいえ、彼は変わりませんでした。彼はダニエルの神のことは知ることはできましたが、自分自身は知らなかったのです。その証拠に彼は、その後に金の像を平地に作りました。彼の生活は変わっていなかったのです。そして、全バビロンにいる指導者たちを集めて、その像の前でひれ伏すように命じました。けれども、ある者たちがダニエルの友人三人を訴えました。彼らが像の前にひれ伏さないと告げ口したのです。それで三人が引き出されましたが、彼らはそれでもひれ伏さないと明言しました。それで王は彼らを燃える火の炉に投げ込んだのです。ところが、なんと炉の中で彼らは歩き回っています！しかもその中に第四の、神の子と思われる方がいます。それでネブカデネザルは彼らを火の中から出し、こう言ったのです。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。それゆえ、私は命令する。諸民、諸国、諸国語の者のうち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神を侮る者はだれでも、その手足は切り離され、その家をごみの山とさせる。このように救い出すことのできる神は、ほかにないからだ。」(3:28-29)」

これで彼は完全に、天の神を知ったかに見えます。ほめたたえ、彼らの神を認めています。さらに、彼らの神を敬わない者は処刑されるとまで断言しています。このような神は他にはいないとまで言っています。果たして、これで彼は神を知ったのでしょうか？いいえ、他の者たちに神を信じるのを強要しているところに、まだこの神を知っていない印があります。

これだけの証拠があるのに、これだけの賛辞をイスラエルの神に対して向けているのに、なぜ

ネブカデネザルが神をまだ知らないと言うのですか？と言われるかもしれません。それはダニエル書の次の章で分かります。この王は、この神を知るために自分を捨てていなかったのです。彼は王となり、国も安定して、それでゆっくりしている時に夢を見ました。それは木が成長して、繁栄したけれども、天使によってばさっと切り取られて、根株だけになった。そして獣の心が与えられ、七つの時が過ぎたら人間の心が戻されるという内容でした。ダニエルがそれを解き明かし、それはまさに王、ネブカデネザルだったのです。彼は宮殿で、自分の王国、自分の権勢、自分の威光をほめたたえました。その瞬間に天使によって彼は、獣のようにされてしまいました。そして、七つの時、おそらく七年間ということでしょうが、鎖につながれて牛のように草を食べながら、露に濡れながら生きていたのです。

そして七年後、彼に理性が与えられました。「その期間が終わったとき、私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻って来た。それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押えて、「あなたは何をされるのか。」と言う者もない。(4:34-35)」彼は、力強い神の主権に服したのです。自分を捨てました。自分の高慢を捨てました。神について聞いて、見ただけでなく、自分自身が神を王として迎え入れ、ひれ伏したのです。これが、神について知っていることと、神ご自身を知っていることの違いです。

ネブカデネザルは、神に服したので神を知ることができました。ヤコブ書には、「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。(2:19)」とあります。神に服することが神を信じることであり、神に従えば、必ずその人の生活に変化があります。ですから神を知るというのは、幻の中で神を見たり、感情として神を感じたり、神がここにいる気配がするというような神秘体験ではありません。私は神の前でへりくだって、神に服する時、つまり神に対して罪を犯した、そして神の基準から離れているということを知り、自分を神に任せる時に、神を知ることができます。イエス様は言われました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)」この「来る」という行為が、神を知るための道です。そうすれば、ヨブのように魂を休ませることが出来ます。

2B 自分の蔑み 6

そしてヨブは 6 節でこう言っています。「それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めませぬ。」神を知ることでできた者、神との出会いをした者こそ、初めて自分を蔑むことができます。ヨブは、決して間違ったことをしていませんでした。彼は神に抛り頼み、正しく潔癖に生きていました。しかし、正しいことが神に彼を近づけることはなかったのです。神の聖なる姿、その正しい姿を見て、自分が正しいか正しくないかと自己評価するのではなく、ただ神の姿を見ることによって、自分がいかに罪深く、汚れに満ちているかを知ることができます。言い換えますと、主に出会ったこと

のない人は本当の意味でへりくだっていません。

旧約聖書に、もう一人、そうした人物があります。預言者イザヤです。彼は、ウジヤという王の治世の中で、エルサレムとユダの中に起こっている悪いことを、怒りをもって預言していました。神はこのような汚れに対して、裁きを行なうと宣言していました。ところが、ウジヤが死んだその年に、彼は神の御座の幻を見たのです。イザヤ書 6 章 1-5 節を読みます。「ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ち。」その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」イザヤは、自分が怒って預言していたその汚れた民と同じように、自分も汚れており、その預言している口も汚れていることを悟りました。御座におられる主の幻を見たからです。そして、もっぱら主ご自身によって、祭壇にある炭火によって、その口が清められました。

私たちが主の前で聖い者として、また正しい者として立つことのできるのは、唯一、主ご自身の聖めと正しさが私たちに転嫁した時だけあります。自分が正しく、自分が聖くなるのではなく、聖なる、正義の神ご自身に私たちが会い、そして自分のとてつもない汚れを悟り、その悲しみと霊的貧しさの中で、主ご自身が私たちを聖めてくださることによってのみ生きることができます。

ヨブはその過程を踏みました。神に対して、自分が決して間違ったことをしていない、私は正しく潔癖だと言い張りしましたが、ついに神ご自身の前で、そのご計画と主権の中に自分を明け渡すことができ、それで自分の至らなさをしり、神から義と認められるようになったのです。皆さんはいかがでしょう？まだ神について聞いているだけでしょうか、それとも神を知ったでしょうか？自分が何ができているか、できていないかという自分の義で悩んでいないでしょうか？それとも、神が力強い御手をもって貴方を治めておられることを、認めておられるでしょうか？その主権に服する時に、神の恵みの御顔を仰ぎ見ることができます。

『主があなたを祝福し、あなたを守られますように。

主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。

主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』

(民数記 6:24-26)